

主日礼拝

2024年2月4日（日）

題 「神の業はこの人を通して」

テキスト：ヨハネによる福音書9章1～12節

皆さん、おはようございます。

今日の聖書の個所は、イエスさまのされた愛による奇跡の業でとても有名な個所の一つです。一度読んだら忘れることのできないような物語、出来事だと思います。

イエスが生まれつきの盲人をいやされた出来事です。私ごとですが、40代の頃は、明石の教会で牧師として働いていました。ある時、礼拝の説教の個所にこの個所を選んだのですが、礼拝を終えると年齢は私より10歳以上の方で、兵庫県庁に務めておられる男性の方が近づいて来られて、わたしに、「この聖書の個所を何度も話してほしい。」と言われた言葉を今でも覚えています。この方は、その後数年して召されました。

この方とは、ゆっくりと話す機会がなかったのが残念でした。

聖書に記されたイエスのなされた業を見ていきましょう。

1節、2節を読みます。「さて、イエスは通りすがりの、生まれつき目の見えない人を見かけられた。弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、誰が罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」これはイエスが地上を生きておられた今からおよそ2000年前のユダヤ社会の考え方を反映していると思われます。イエスの弟子たちは、イエスに向かって「ラビ」と呼びかけました。ラビとはユダヤ社会では「先生」という意味です。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、誰が罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」当時の社会の人々の考えでは、病気や不幸、障害などは罪の結果であると受け止められていたようです。これはユダヤ社会だけのことではなく、日本においても何かの祟りであるとか、親が罪をおかしたからだとか、今では間違った考えが支配的だったのです。現在ではどうでしょうか？今でもそのような間違った考えを持っている人たちはいるのだと思います。そういう考えに苦しめられている障害を負った人たちや、親、家族もいると思われます。間違った考えは、正していかなければ残り続けるのです。わたしは30代後半に、教会の牧師ができなくなり愛媛県の松山市にある教団の松山教会が生みだした「あゆみ学園」という社会福祉施設で施設長として6年間働いたことがあります。この施設は、当時いわゆる知恵が遅れているとみなされていた幼児たちの通う通園施設でした。

家から通園バスで通って来て、スプーンを使って自分で食べる練習や靴をはく練習などをする施設です。偏見や差別に苦しんで来られた、苦しんでいるお母さんたちもおられました。

「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、誰が罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」弟子たちの問は、いわゆる世間、社会の人々の間でもありました。それに対して、2000年前に生きられたイエスは、答えられたのです。

3:イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。これは当時の人間の偏見を打ち砕く、画期的な言葉でした。言葉は、気持ちや意思を表すのです。

「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。」「神の業がこの人に現れるためである。」 どういうことでしょうか？ もちろん神さまがこの人に良いことをしてくださるという意味もあるでしょう。しかし、この障害を負ったこの人が担う役割がある。働きがあるということとして受け止めます。

つきつめて言えば、この人を通して神さまの業が、わたしたちの住んでいるこの社会に表れていくということです。

神の独り子であるイエスは言われました。

4:わたしたちは、わたしをお遣わしになった方の業を、まだ日のあるうちに行わねばならない。だれも働くことのできない夜が来る。

5:わたしは、世にいる間、世の光である。」と。イエスは泣いたり笑ったり、時に怒ることもされました。特に差別的な扱いや、自分の権力を増し加えようとするような力とは闘って行かれたのです。しかし、その心にはいつも深い愛があったのです。

十字架の上においても、自分を十字架に追いやった人々のために神にとりなしの祈りを捧げられたのです。

イエスは世の光としてこの世を、時に喜び、時に苦しんで生きて行かれたのです。

6:こう言ってから、イエスは地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになった。

7:そして、「シロアム——『遣わされた者』という意味——の池に行って洗いなさい」と言われた。そこで、彼は行って洗い、目が見えるようになって、帰って来た。

8:近所の人々や、彼が物乞いであったのを前に見ていた人々が、「こ

れは、座って物乞いをしていた人ではないか」と言った。

9:「その人だ」と言う者もいれば、「いや違う。似ているだけだ」と言う者もいた。本人は、「わたしがそうなのです」と言った。

10:そこで人々が、「では、お前の目はどのようにして開いたのか」と言うと、

11:彼は答えた。「イエスという方が、土をこねてわたしの目に塗り、『シロアムに行って洗いなさい』と言われました。そこで、行って洗ったら、見えるようになったのです。」

12:人々が「その人はどこにいるのか」と言うと、彼は「知りません」と言った。

イエスに癒されたこの男性は、イエスを伝える者、遣わさ者となって生きて行ったのです。

わたしは、歴史におけるこの「世の光」という言葉の使い方の歴史から、三つのことを思うのです。

一つ目は「この子らに世の光を。」という言葉です。この言葉は、日本でも、昔から言われて来たことです。このことばは、長く受け止められて来ましたが、この言葉には、この子らはかわいそうな子、憐みをかけてあげないといけない子、というような。してあげるという上から目線の人間の態度があるように思えるのです。日本で障害児教育の父と呼ばれ尊敬された糸賀一雄という人がいます。彼は「この子らに世の光を」ではなく、「この子らを世の光に」と言ったのです。両方の言葉は、似てますが、内容はかけ離れています。

「この子らに憐み」をではなく、「この子らを世の光」として社会の人々が受け入れていくという考え方であり、生きる姿勢であり行動です。

そして更に、主イエスの言われた言葉やその思いから「この子らは世の光」であるという内容の言葉だと思うのです。この子らは世の光として生まれたのだ。そして生きて行くのだ、ということです。愛なる神さまの働きはこの子らを通して表れて行くのだということです。この子らが、家庭の中でも、今なお偏見や差別のある社会の中で堂々と生きて行って良いのだということです。

社会をより良く変えて行く力となって神さまに用いられて行くということです。

11:彼は答えた。「イエスという方が、土をこねてわたしの目に塗り、『シロアムに行って洗いなさい』と言われました。そこで、行って洗ったら、見えるようになったのです。」

12:人々が「その人はどこにいるのか」と言うと、彼は「知りません」と言った。

宣教の終わりに、わたしは今日の聖書の個所を今回読んで、自分のこととしても学んでいて気づかされたことなのですが、

「人間は年を重ねるごとに、身体や心に、弱さを抱えながら生きて行くようになる。」ということです。身心の弱さは、罪や不幸や障害者であるとレッテル張りをしたり、されるのではなく、神さまの愛と力を伝えるものとして用いられて行くのだということです。

ですから、今日イエスの言葉を聞いたわたしたちは、お互いの交わりを育てて行く課題を与えられているのです。神の業は弱さを抱えた人を通してこの地上に表れて行くということを覚えて、生きて行きたいと願います。

皆さまの上に、主の平安を祈ります。